

矢島 裕之

2002年6月7日 トーマス・ブルスイヒ氏朗読会

„Am kürzeren Ende der Sonnenallee“より

矢島 裕之

世界中が日本・韓国で開催された4年に一度のサッカーの祭典、ワールドカップに酔いしれる中、後に当初の下馬評を覆し準優勝したドイツから作家、トーマス・ブルスイヒ (Thomas Brussig) 氏を招いて朗読会が催された。今回氏は日本独文学会での朗読会を皮切りに各地の大学でも講演会、朗読会をされたが、本学の朗読会もその一環であった。日本を訪れる前はワールドカップ共催国である韓国でも講演会等をされてきた。

6月には最新作„Leben bis Männer“は邦題『ピッチサイドの男』として日本でも出版された。内容は時節にふさわしく、サッカーものである。氏は現在ドイツでもっとも注目を浴びている作家である。

今回朗読会で扱われた作品は、1999年に出版されたブルスイヒ氏の第三作目の小説„Am kürzeren Ende der Sonnenallee“ (邦題:『太陽通りゾンネンアレー』)であった。同作は先に映画として上演されており、大ヒットとなった。内容は東ベルリンの太陽通り (ゾンネンアレー) 沿いに住む、若者たちの青春時代を描いた作品である。そこには作者が目の当たりにしていたと思われる西側からは窺うことが出来なかった東ベルリンの日常が描かれている。確かに所々「面白おかしく」描かれてはいるのだが、この形容だけで同作品を批評することは出来ない。例えば主人公のミヒャと共にミリアムが映画館から「心穏やかに」出てきたところ、軍事パレードで目の前を戦車が走行するという現実と直面し、塞ぎ込んでしまう場面などは、我々読者には東西冷戦という陰鬱な影を投げかける。

本朗読会が催されるにあたり、朗読される個所の翻訳が学生によって試みられた。幾つかの個所に分けられたテキストを、院生が中心となり学部生と共に行われた。また『ゾンネンアレー』は本学の講義でも扱われており、受講生が講義で扱った個所を補いながら作業は進められた。翻訳過程で起こった疑問や、意味不明な個所は朗読会で学生によって、当日質問されることになった。また講義の空き時間や週末を利用して私的のだが、『我ら勇者たち』、『ゾンネンアレー』のビデオ上映会などが

東京都立大学行事報告

行われ、学外からの参加者もあった。

朗読会は午後 4 時過ぎから 6 時過ぎまで行われた。本学教員・学生、また多数の他大学の教員・学生など内外合わせて 50 人前後の参加により、盛大に催された。まず今回の主役であるブルスイヒ氏の紹介が本学教員 ヴァルター・ループレヒターと初見基によりなされ、その後早速、氏自らによる朗読が行われた。途中テキストをその場で氏自ら改変をするなどもあった。残念なことにその個所をチェックしていなかったのは、筆者の落ち度であり悔やまれる所である。朗読後学生から様々な疑問が発せられた。テキストに出てくるミヒャの兄ベルントが語る意味不明/翻訳不可能な個所については、そこが狙い、とのこと。またなぜ「実存主義者」を最後に「エリザベート」と名付けたかについては、「実存主義者」では母親にはなれないから、などと答えた。「実存主義」関連で早稲田大学のシャイフェレ氏から「昔ジャン・パウ(Jean Paul)の本を東ドイツで没収された。」との発言があった。それに対しては「サルトル(Jean-Paul Sartre)と間違えたのだろう。」との切り返しに会場が沸く場面もあった。最後に学生から「東ドイツの一番辛かった思い出」についての質問があったのに対して、「非常に内面に深く関わっているので、答えることは出来ない。」と回答された。そこにはこの作品で「思い出」の中にある「東ドイツの青春時代」を描くことで、今は無き母国にノスタルジーを感じながらも、実際はどう昔と向き合っていけばいいのか、「思い出„Erinnerungen“」と「記憶 „Gedächtnis“」の間で未だに苦悩する作者の姿が垣間見えた気がした。

朗読会は盛況のうちに終わり、その後は参加者のサインの要求にも氏は快く応対し、歓迎会にも時間の許す限り参加していただいた。

作者本人によるこのような講演に参加できたことは、我々ゲルマニスティックに携わる者にとって非常に意義深いことであったであろう。

※ トーマス・ブルスイヒ氏の紹介については、本学大学院生吉田達也が非常に詳しく挙げているのでここではほとんど割愛した。